

「看護学生の職業未決定について」

——職業未決定尺度の下位尺度作成による検討——

奥田 弘 恵, 祖父江 育 子

Vocational Indecision in Student Nurses

—— An Analysis Using a Subscale Derived from the Vocational Indecision Scale ——

Hiroe OKUDA, Ikuko SOBUE

Abstract: We investigated the state of vocational indecision using the Vocational Indecision Scale developed by Simoyama in 531 student nurses at 2 three-year junior colleges in Kyoto City. Of 369 students who replied to the questionnaire, 359 female students were analyzed. Factor analysis showed 4 subscales of the Vocational Indecision Scale: “emotional confusion”, “avoidance of problems”, “positive exploration”, and “achieving a decision”.

Next, each subscale was compared among the grades of the students. According to the Vocational Indecision Scale, the score for “emotional confusion” and that for “avoidance of problems” significantly higher in 2nd-year students than 1st-year students. The score for “achieving a decision” significantly differed between the 1st-year and 2nd-year students and between the 2nd-year and 3rd-year students, being the lowest in the 2nd-year students.

Additional surveys on this issue are needed to establish valid and reliable subscales relating to vocational indecision.

Key words: student nurses, vocational indecision, Vocational Indecision Scale, subscale

はじめに

青年期はさまざまな役割実験を繰り返しながら、幼児期からの同一化群を統合し、「自分は何者か」という自己疑念に対する答えを模索していく時期である。Erikson¹⁾によると、青年期には職業決定を核とした社会的役割の獲得によって、自我の確立が達成される。

したがって、職業決定・未決定の状態は職業的同一性の達成度を表すだけでなく、自我の確立度を推測する上でも重要な尺度となりうると考えられる。

これまで、学生の自我同一性形成や職業的同一性形成の達成度を測定する尺度として、Marciaによって考案された半構造化された同一性地位面接²⁾や、中西(1982)³⁾の価値観と職業観の二領域における同一性地位尺度、あるいは松下(1989)⁴⁾の看護学生用の自我同一性地位テストなどが用いられてきた⁵⁻⁷⁾。これらは、学生の自我あるいは職業的同一性の発達状態を

京都大学医療技術短期大学部看護学科
京都市左京区聖護院川原町53
Division of the Science of Nursing, College of Medical Technology, Kyoto University
1998年6月30日受付

知るため、調査結果により学生を同一性達成、早期完了、モラトリアム、同一性拡散の4つの地位に分類(タイプ分け)するものである。

これに対して、職業未決定という状態についての研究は、同一性地位の研究ほどはされていないようである。青年期にあたる学生が、将来の職業を決定できない、あるいは決定していないという状況には、積極的モラトリアムから、スチューデント・アパシーと言われる学生生活の不適応からくる無気力まで、さまざまな状態が含まれている。そこで、職業未決定の状態がどのようなものかを知ることで、その学生の自我同一性や職業的同一性の発達度がある程度推測されうることを下山(1986)^{8,9)}は示唆している。

看護はもともと専門性の高い分野であり、卒業後の就職についてもある程度職種が限定されていることから、職業未決定はあまり注目されることがなかったと思われる。しかし、看護学生においても、近年は偏差値重視の進路指導で学科選択をしている者が増加し、入学後の不適応や卒業後の職業決定ができない等の問題が指摘されてきている。松下(1989)によると、職業的同一性地位がモラトリアム群のものは、看護学校卒業後さらに進学を希望する傾向にある。これらの職業決定ができない学生に対しては、その職業未決定の状態(態度)を見極めた上での関わりが必要であると考ええる。

そこで、本研究では職業未決定尺度を用いて、看護学生の職業未決定の状態(タイプ)を表す下位尺度の作成と、項目の検討を行うことを第1の目的として、作成した下位尺度で学年比較を行うことを第2の目的とした。

方 法

1. 対 象

京都市内の3年制A短大・B短大の看護学生531名を対象に調査を実施した。

2. 調査期間および方法

調査期間は1998年4月～5月であった。調査法は質問紙留置法を用いた。

調査項目は、下山(1986)の職業未決定尺度を一部修正し使用した。質問項目は37項目であった。

評価法は4件法で「あてはまる」を4点、「ややあてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点として得点化した。また、各下位尺度内の項目得点を合計したものを下位尺度得点とした。

分析方法は、因子分析、Spearmanの順位相関係数、上位下位分析、Cronbachの α 係数、分散分析、下位検定にはTukey法を用いた。

結 果

回収数は1回生128名(70.3%)、2回生144名(82.8%)、3回生97名(55.4%)、合計369名(69.5%)であり、性別は男子10名(2.7%)、女子359名(97.3%)であった。本研究においては男女比により性別比較が困難なため、女子学生のみを分析対象とした。

1. 下位尺度の作成

職業未決定の尺度項目には職業の既決を示す4項目が含まれており、職業未決定の状態を表す他の項目とは内容的にも一線を画している。そのため、この4項目を除いた33項目について因子分析し、固有値1.0以上でバリマックス回転を行った結果、職業未決定の状態を表す3因子が抽出された。回転後の因子負荷量は表1に示す通りである。

第1因子は、「誤った職業決定をしてしまうのではないかという不安があり、決定できない。」「職業決定のことを考えるととても焦りを感じる。」など、職業決定についての不安や焦り、自信喪失を表しており、「情緒的混乱」と名付けた。第2因子は、「生活が安定するなら、職業の種類はどのようなものでよい。」という自分の適性や興味を職業決定に結びつけていこうとしない安易な考えや、「できることなら職業決定は、先に延ばし続けておきたい。」など、職業決定という問題と直面することを避けたり先延ばししている状態を表している。そこで「問題回避」と名付けた。第3因子は、「職

表 1. 再構成された職業未決定尺度の下位尺度

下位 尺度	質 問 項 目	因子負荷量			α 係数	総項目得 点との相 関係数
		I	II	III		
情 緒 的 混 乱	21. 誤った職業決定をしてしまうのではないかと不安があり、決定できない。	0.71	0.16	0.18	0.89	0.66
	24. 将来の職業のことを考えると気が滅入ってくる。	0.70	0.27	0.03		0.67
	11. 職業決定のことを考えると、とても焦りを感じる。	0.69	-0.11	0.05		0.49
	17. これまで自分自身で決定するという経験が少なく、職業決定のことを考えると不安になる。	0.66	0.35	0.03		0.63
	5. 望む職業につけないのではと不安になる。	0.64	-0.12	0.08		0.46
	28. 今の状態では、自分の一生の仕事などみつきりそうもない。	0.62	0.44	0.16		0.70
	23. 職業につけたとしても、うまくやっていく自信がない。	0.61	0.26	-0.06		0.56
	33. 自分が職業としてどのようなことをやりたいのかわからない。	0.56	0.46	0.17		0.65
	27. 自分一人で職業を決める自信がない。	0.56	0.39	0.18		0.64
	2. 自分の将来の職業については、何を基準に考えたらよいのかわからない。	0.52	0.22	0.17		0.52
	22. 私は、いつも自分で実現できないような職業ばかり考えている。	0.51	0.20	0.18		0.57
	9. 自分がどのような職業に適しているのかわからない。	0.46	0.27	0.17		0.47
	15. 自分の職業については、いろいろと計画をたてるが、一貫性がなく、次々に変化していく。	0.46	0.32	0.30		0.55
	30. 私は、あらゆるものになれるような気持ちになる時と、何にもなれないのではないかと不安になる時がある。	0.45	0.21	0.23		0.48
問 題 回 避	26. 自分にとって職業につくことは、それほど重要なことではない。	-0.00	0.64	0.08	0.82	0.47
	29. 将来の職業については、考える意欲が全くわからない。	0.39	0.62	0.08		0.63
	13. 自分を採用してくれる所なら、どのような職業でもよいと思っている。	0.08	0.56	-0.04		0.37
	16. 自分の知っている職業の中で、やりたいと思う職業がみつからない。	0.50	0.56	0.05		0.54
	4. できることなら職業決定は、先に延ばし続けておきたい。	0.34	0.53	0.29		0.63
	32. できることなら誰か他の人に自分の職業を決めてもらいたいと思うことがある。	0.40	0.52	0.07		0.50
	34. できることなら、職業など持たず、いつまでも好きなことをしたい。	0.18	0.52	0.08		0.47
	3. せっかく大学（短大）に入ったのだから、今は職業のことは考えたくない。	0.22	0.52	0.21		0.53
	7. 生活が安定するのなら、職業の種類はどのようなものでもよい。	0.00	0.50	-0.10		0.34
	37. 自分の将来の職業について真剣に考えたことがない。	0.25	0.50	0.04		0.46
積 極 的 模 索	10. 職業決定と言われても、まだ先のことでピンとこない。	0.33	0.45	0.31	0.75	0.52
	36. 学歴や“ツテ”を利用してよい職業につきたい。	0.05	0.40	0.24		0.37
	31. これだと思える職業がみつかるまでじっくり探していくつもりだ。	0.06	0.03	0.75		0.58
	35. 職業は決まっていらないが、今の関心を深めていけば職業につながってくると思う。	0.06	0.15	0.66		0.47
	12. 職業を最終的に決定するのはまだ先のことであり、今はいろいろなことを経験してみる時期だと思う。	-0.02	0.22	0.64		0.42
	6. 将来、やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている。	0.16	-0.08	0.62		0.44
	18. 職業に関する情報がまだ充分にないので、情報を集めてから決定したい。	0.39	0.01	0.57		0.48
既 決	25. 将来の職業についてはいくつかの職種に絞られてきたが、最終的にひとつに決められない。	0.46	0.07	0.54	0.78	0.49
	1. 自分の職業計画は、着実に進んでいると思う。					0.57
	8. 自分のやりたい職業は決まっており、今は、それを実現していく段階である。					0.65
	14. 自分の職業決定には自信を持っている。					0.53
	20. 自分なりに考えた結果、最終的にひとつの職業を選んだ。					0.58

表2. 職業未決定の下位尺度間の相関係数

下位尺度	情緒的混乱	問題回避	積極的模索	既 決
情緒的混乱				
問題回避	0.66****			
積極的模索	0.46****	0.38****		
既 決	-0.67****	-0.53****	-0.48****	

**** p<0.0001

表3. 職業未決定下位尺度得点の学年比較

下位尺度	学年	平均値±標準偏差	
情緒的混乱	1	25.8±7.6	* }
	2	29.6±8.4	
	3	27.3±7.8	
問題回避	1	18.8±5.1	* }
	2	21.2±6.0	
	3	19.6±6.0	
積極的模索	1	15.0±4.4	
	2	15.5±3.9	
	3	14.4±4.2	
既 決	1	11.6±3.0	* }
	2	10.5±3.0	
	3	11.4±2.9	

*p<0.05

業を最終的に決定するのはまだ先のことであり、今はいろいろなことを経験してみる時期だと思う。」など、将来の職業決定に向けて積極的に模索している段階と言え、「積極的模索」と名付けた。

2. 下位尺度の信頼性の検討と項目の調整

この抽出された3因子を職業未決定の下位尺度とし、各下位尺度の信頼性の検討のために、各項目得点とその項目を除いた下位尺度内の総項目得点との相関係数(ρ)をとった。その結果、 $\rho \leq 0.20$ の1項目(第2因子)を除外した。次に、残る32項目において、項目分析による下位尺度の内的整合性を検討するため、上位下位分析を行ったところ、全ての項目において1%水準で有意差がみられた。さらに、各下位尺度の α 係数をみたところ、表1に示す通り0.75から0.89という値であり、一応の内的整合性を有

していると判断された。よって、これらの項目を因子負荷の大きい順に下位尺度として採用した。

また、因子分析の際に除外した職業既決の4項目について、各項目得点とその項目を除いた総項目得点との相関係数をみたところ、0.53から0.65という値であった。上位下位分析でも全ての項目において1%水準で有意差がみられ、 α 係数は0.78であった。そこで、この4項目も下位尺度に加え、「既決」と命名した。

以上の4尺度を職業未決定の下位尺度として採用した。表1は、各下位尺度の質問項目、各項目の因子負荷量、各下位尺度の α 係数、各項目得点とその項目を除いた下位尺度内の総項目得点との相関係数を示したものである。

3. 下位尺度間の相関

下位尺度間の関連をみるため相関係数をとったところ、全ての尺度間で有意な相関($p < 0.0001$)がみられた。このうち「既決」と他の下位尺度との間では、いずれも有意な負の相関を示した。(表2)

4. 学 年 比 較

職業未決定の各下位尺度得点を学年比較した結果、「情緒的混乱」と「問題回避」において、1回生と2回生の間に有意差($p < 0.05$)があり、2回生が1回生より高得点であった。また、「既決」は1回生と2回生、2回生と3回生の間に有意差($p < 0.05$)があり、1回生が最も高得点で、3回生が次に高く、2回生は最も得点が低かった。「積極的模索」は学年により有意差はみられなかった。(表3)

考 察

1. 下位尺度の構成

看護学生の職業未決定の状態の分類尺度（下位尺度）を作成するために、職業未決定尺度を用いて調査を実施した。職業未決定尺度は、職業未決定の態度を表しており、因子分析により4つの下位尺度を抽出した。「情緒的混乱」は、前述したように職業決定という課題に直面し、不安や焦りを感じたり、自信を失ったり、あるいは考えるがわからない、非現実的なことを考えるなど、混乱に陥っている状態と考えられる。自己決定に自信がなく、そのため将来に不安を感じていることから、自己に対する基本的な信頼ができていないために決定できないのではないかと推察される。これは、自我の発達が未熟な上に、今まで自己決定の経験が不十分であったのに職業決定を迫られて、取り組めないでいる状態と考えられる。

「問題回避」は、職業決定という課題に向き合おうとせず、「先に延ばし続けておきたい」「真剣に考えたことがない」「どのような職業でもよい」など、安易な考えや、当面は考えたくないという態度を表している。真剣に考えることを避けているため、「情緒的混乱」のような不安や混乱がみられないと思われる。また、「できることなら、職業など持たず、いつまでも好きなことをしていきたい。」にも代表されるように、未だ生涯の問題ともなる職業を持つということが受け入れられていない。職業決定は社会的役割獲得の中核をなすものであり、社会との能動的な関わりを意味するものである。また、職業決定は社会の中での自分の生き方を決めることでもあり、このタイプの学生は、自我の発達が未熟であることから、自分の将来について、自立した生き方を具体的に想像することができない状態でないかと推察される。

「積極的模索」は、積極的に自分の適性に合った職業を探していこうとする態度である。前の「情緒的混乱」「問題回避」とは異なり、最良の選択をするための猶予期間であると考えら

れ、「模索」の段階が進めば決定に至る、いわば最も職業決定に近い未決定の状態である。「既決」はすでに職業決定をしている段階であり、自我の確立度も最も高いことが予想される。なお、本研究では職業未決定尺度の下位尺度は、因子分析の結果4尺度で構成されたが、下山は6尺度で構成されていた。下位尺度項目を比較すると、比較的好く合致しており、「情緒的混乱」は下山の「未熟」「混乱」，「問題回避」は「安直」「猶予」，「積極的模索」は「模索」，「既決」は「決定」に対応していた。「未熟」「混乱」は実際に職業決定という課題にぶつかって答えを出せない状態であり、「安直」「猶予」はこの課題を避けて通ろうとしている状態であるという共通点があり、今回の因子分析でそれぞれ1因子に集約されたものと考えられる。

2. 下位尺度間の相関

各下位尺度間の相関は、表2に示す通り、4尺度すべてにおいて有意な相関がみられ、それぞれの状態が互いに無関係のものではないことを示していた。「既決」においては、「情緒的混乱」「問題回避」「積極的模索」とそれぞれ負の相関が認められたが、これは「既決」という状態が、職業未決定の状態を表す他の3つとは異なっているため、納得のいく結果であるといえる。

3. 下位尺度得点の学年比較

下位尺度得点の評価は、得点が高いほどその傾向が高くなるように配点されている。今回の分析より、平均値をみると「情緒的混乱」と「問題回避」において、1回生では最も得点が低く、2回生になると上昇し、3回生でまた少し戻って低くなるという結果であった。これは、調査時期が4～5月であったことから考えると、1回生は入学後まだ間もない時期であり、入学前からある程度将来の職業を意識して進路決定した結果、職業決定に対し、安定した態度を保っていたと考えられる。2回生になってこれらの得点が増しているのは、1年間看護職にむけての専門教育を受け、「自分は看護婦としてやっていけるのか」「看護婦という職業は本当

に自分に合っているか」と、自分の能力や適性を評価し始めて、迷いが生じてきているためではないかと推察される。3 回生では再び下降しているものの、1 回生より高得点のままとどまっている。2 回生と比べて下降しているのは、2 回生の間に自我や職業の同一性形成が促進された結果とも考えられる。しかし、今回の調査では職業未決定の状態に影響を及ぼす要因についての探索は行っていないため、今後検討が必要な課題である。また、職業の「既決」においても、1 回生で最も高く、2 回生で下降し、3 回生で上昇していた。下山⁴⁾の調査では、先に述べた職業未決定尺度の下位尺度である「安直」「混乱」において、やはり2 回生で得点が上昇し、3 回生で再び下降している。また、笠井ら (1996)¹⁰⁾の看護学生の同一性地位研究において、職業同一性 SCT による測定で、1 年生が最も高得点で、3 年生のほうが低くとどまっているという結果も報告されている。今回の調査結果はこれらと一致するものであった。

3 回生は、調査時期が実習導入時期であり、臨地実習による影響はまだ強く受けてはいないと思われる。今回の調査結果から、職業未決定の状態は固定的なものでなく、学年が進むにつれて流動的に変化していくものであることが推測される。3 回生においては、臨地実習の経験が自我同一性と職業的同一性形成の促進に大きく影響すると考えられるため、今後調査時期を変えてみる必要がある。

結 論

職業未決定尺度を用いて、看護学生の職業未決定の状態を測定し、下位尺度を作成した。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 職業未決定の状態は、1) 情緒的混乱 2) 問題回避 3) 積極的模索 4) 既決の4つの構成因子により表されていた。
2. 職業未決定尺度では、1) 情緒的混乱 2) 問題回避において、2 回生が1 回生より有意に高得点であった。また、4) 既決にお

いては1 回生が3 回生より有意に高得点であり、3 回生は2 回生より有意に高得点であった。

看護学生では、職業決定が1 回生で最も高く、2 回生では下降し、3 回生でまた上昇するという変化をしていた。今後、下位尺度の構成因子の安定をはかるためには、さらに調査が必要である。また、自我同一性との関連を実証的な研究で明らかにしていくことが重要であると考え

る。最後に、研究にご協力いただいた京都府立医療技術短期大学の西田直子先生と被験者の皆様に深く感謝いたします。

文 献

- 1) R・I・Evans: エリクソンは語る—アイデンティティの心理学— (岡堂哲雄, 中園正身訳). 東京: 新曜社, 1997
- 2) 福富護: 同一性地位に関する実証的研究—女子大学生に対する同一性地位尺度化の試み—. 東京学芸大学紀要第1部門, 1981; 32: 183-197
- 3) 中西信男ほか: アイデンティティの心理. 有斐閣, 1982
- 4) 松下由美子: 看護学生における職業的同一性形成に関する研究. 第20回日本看護学会集録看護教育, 1989; 201-203
- 5) 安藤詳子, 内海滉: 看護学生の職業的同一性形成. 名古屋大学医療技術短期大学部紀要, 1993; 5: 133-143
- 6) 安藤詳子, 内海滉: 看護学生の自我同一性に関する研究. 日本看護研究学会雑誌, 1995; 18: 7-17
- 7) 笠原昭彦, 鈴木初子: 看護短期大学学生の自我同一性地位と対人関係, 時間的展望および職業選択の関連. 名古屋市立大学看護短期大学部紀要, 1997; 9: 87-96
- 8) 下山晴彦: 大学生の職業未決定の研究. 教育心理学研究, 1986; 34: 20-30
- 9) 下山晴彦: スチューデント・アパシー研究の展望. 教育心理学研究, 1996; 44: 350-363
- 10) 笠井恭子, 川端啓之: 看護学生の同一性地位についての研究. 福井県立看護短期大学部論集, 1996; 3: 69-79